



写真(南部戦々地跡火の国の塔にて)

青年団沖縄研修



発行所 津奈木公民館
〒北郡津奈木町
電話(代表115番)
編集 編集委員会
印刷所 緒方印刷所
八代市通町
電話(八代)② 3117番

目的

次代をなう青年が心身共にたくましく成長し郷土の発展をもちます原動力となることは町民すべての願である。そのためには、郷土にない手として指導力を身につけると共に青年団員が、研修及び規律ある団体生活を通じて心身を鍛錬し、相互理解を深めると同時に井の中のカラスとならず、沖縄から見た郷土と我々青年の置かれている立場を理解する場を与え、沖縄青年との親善交歓を通じ理解と親睦を深めると共に、熊本の紹介各地の視察見学等を行い国際的視野も広め建國精神を涵養し次代を担う中堅青年の育成を図ることである。期間、三月十二日から十五日迄の三泊四日であった。参加者、33名(内女子17名)で実行生活・研修・レクリ・保健の各委員1名(班長5名、団長1名)で構成された。予定日が変更され、14名の参加希望者が同行できなかったのが残念であった。

出発

三月十二日、三日にはめずらしく雪の降る大口峠を一路鹿児島空港へ、空港着は予定通り、皆の期待と不安を乗せたジェット37はもの

すごい加速と共に離陸した。研修参加者中搭乗経験者は4名である。上空8千位のところで最初の乱気流にぶつかり、機体は大ゆれにゆれ、ふとエアバス機を思い出す。皆の気持をやらぐかのように、スチエラデスのアナウンスが流れる。あいにくのもりで、屋久島・奄美大島は雲の切れ間にチョッと見えただけだった。しかし雲の上は晴天。雲の美しき雄大さは格別であり天下を取った気分であった。約20分遅れ1時45分那覇空港に着いた。ここでハブリングが起きていた。二百メートル先のスポットにジャンボジェットが、ハブリングされたところの事、警戒がものものしく四方八方よりパトカー・機動隊が集結して来る、本土のようにパイパーではなくサイレンなのでなおさら緊張感が高まる。皆早々にタクシーに乗り込み、県立赤松青年の家着が2時30分、所長職員との挨拶を済ませ、津奈木町農協へ全員無事の連絡を有線放送にて流されるよう願う。

研修

3時よりオリエンテーションを受ける。いよいよ期待の沖縄青年との交歓会が午後8時より始まる。沖縄各地から参集した青年18名(内女子5名、小学生1名)が我々青年団と職業団体活動人生等や沖縄の諸問題について、和室にてひざを混しえある者は肩を組み真剣に話し合っていた。研修時間を1時間もオーバーしたほどだった。この時間に培われた友情は団員一人一人にとって何事にも変えられないものの様に思えた。この交歓

で一番感心した事、の各市町村が青年教育に努力している事だ。人口一萬三千名の東風平村(コチンダ)では青年団に当初予算40万支給の事である。我町は当初予算一萬円である(本年度五万)。三月十三日、研修生活は朝6時30分起床。朝のついで、朝食、8時より9時迄講師付の研修(社)会における青年の役割、9時より10時迄同テーマの分収会、10時より12時迄、郷土に対する青年団活動の重要性と第二回九州青年の船乗船の団事務局局長野崎憲章君により各国の思い出、青年の動きを紹介午後一時より五時迄連綿研修の予定であったが、昼食時間所長と雑談を交わしていたところ、講師野崎の関係もあり急遽南部戦々地跡を見学する事に変更した。

視察

研修中に青年の家を出る事は全国でも初めてではないかと思う。バス停の足りも軽く一段と瞳が輝いている。最初の見学地はめづり塔では他団体のガイドを我々のように聞き、沖縄衣装を美しく装った琉球美人と話す事もできた。ここより南部戦地跡である。摩文仁丘まで歩く事にした。10分近い距離である。人は左側通行の為、何かで事故が一番の心配であったが、皆安全歩行を守り途中民家を得ね、瓦の上に猪が乗っている理由などを聞き、家の守り神である事を知る。ある者は老人と対話するうちに方言を学び、お元気ですか沖縄では、ガンヂュー、と言っそうだ。

川内阿弥陀堂
川内区民館の前に、ほこらが二つ並んで建っている。左側の方が阿弥陀堂で、右側の方は山の神である。元々この阿弥陀堂は下山喜代次氏宅附近にあったのを、移したものであるとのことだが、何時頃か不詳である。下川氏宅の附近は今でも堂の前と呼ばれている。筆者は、この阿弥陀堂のゆかりの地、川内峠の阿弥陀石を見るべく、公民館の伊藤主事と二人でこの部落の長老西平忠藏翁にご案内願って、胸突坂を登り、川内赤崎の分水嶺と覚しき峠に立つた。急に目の前がひらけて海が見える。遠く近く春霞の中に、夢の国のような、天草の島々が静かに横たわっている。
西平翁はガサッと杖をくぐって、「此処ですばい」と呼ばれた。堂一枚半位の大石の上に丸形の石が座っている。高さ二M、囲りが二M半位ある。特別珍奇な石ではないが、丸石の頂に二個の下駄の

ほこら巡り (5)

堀 二雄

阿弥陀石は灯が時々見えたとも云い伝えがあるのだから考えると、向うの天草とも関連して夜間交信のための石台であったかも知れない。西平翁が少年の頃阿弥陀堂の仏像が盗まれて大騒ぎとなり、警察が捜査したがとうとう見当りなかつた。立派な仏像で五、六才位の大きさのものであったという。現在の堂には新旧二体の像が安置されている。山の神様と仲良く並んで、目の前の舗装道路を通る村人や学校通いの子供や自動車をしながらハラハラしておられるだろうか。
阿弥陀石にて



わたしたちの先生

あなたのお子さまの担任の先生をごぞんじですか。担任の先生を知らないようでは、ほんとうの子供の教育はできないと思います。そういうしみから写真でお見知り願ひ、道であつたらおたがいに、少なくともえやくなりとかわしてもらいたいものであります。



- 津奈木小学校
- | | | | | | |
|------|-----------|------|---------|------|---------|
| 上右から | 山下先生 庶務会計 | 中右から | 齊藤先生 理専 | 下右から | 川上先生 一年 |
| | 鶴野先生 養護 | | 小島先生 教頭 | | 松永先生 一年 |
| | 塚本先生 五年 | | 徳永先生 四年 | | 芥川先生 校長 |
| | 前田先生 五年 | | 友田先生 四年 | | 宮島先生 二年 |
| | 上田先生 六年 | | 高橋先生 特殊 | | 山田先生 二年 |
| | 権葉先生 六年 | | 緒方先生 促進 | | 森山先生 三年 |
| | | | | | 松本先生 促進 |

津南中学校



- | | | | |
|------|-----------|-----------|----------|
| 上右から | 松村先生 特殊級 | 前田先生 三の四 | 与田先生 養護 |
| | 古川先生 庶務会計 | 浦本先生 一の二 | 上水先生 二の三 |
| | 作田先生 特殊 | 柳迫先生 教務主任 | |
| | 福田先生 一の二 | 川上先生 三の二 | 山本先生 教頭 |
| | 寺尾先生 三の二 | 矢田先生 一の二 | 柳迫さん 庁務 |
| | 広松先生 二副 | 江口先生 三副 | |
| | 千々岩先生 一の三 | 吉田先生 一副 | 前列右から |
| | 大野先生 三の三 | | 益先生 校長 |
| | | | 畑中先生 二の二 |
| | | | 猶木先生 三副 |



- 平国小学校
- | | | | |
|------|---------|-------|---------|
| 上右から | 中山先生 二年 | 後列右から | 開田さん 庁務 |
| | 井川先生 養護 | | 鶴田先生 二年 |
| | 北田先生 三年 | | 三池先生 養護 |
| | | | 堀山先生 五年 |
| | | | 出水先生 教頭 |
| | | | 田中先生 六年 |
| 中右から | 米岡先生 六年 | 前列右から | 三島先生 三年 |
| | 佐藤先生 一年 | | 大橋先生 校長 |
| | 国友先生 五年 | | 上村先生 四年 |
| | | | 松本先生 一年 |
| 下右から | 村上さん 庁務 | | |
| | 西山先生 教頭 | | |
| | 笠先生 校長 | | |
| | 宮崎先生 四年 | | |

婦人会研修報告



吉沢ジツ

私達津奈木町連合婦人会会員の一行三十余名は、三月二十三、二十四の二日間、県立天草青年の家に研修行ってまいりました。

郷土出身者紹介 夢に見る故郷

丸田正人



丸田太郎次男 日本石油入社後、派遣、石油統制会社会計課長、石油配給公園経理部長、日本石油に復帰、会計課長、日本石油瓦斯大阪営業所長、現在、横田石油理事

故郷の昔懐、本年の冬は例年にない寒さでしたが、御元気で桜花爛漫の春を迎えたいと、御慶びを申し上げます。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そしてキャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

郷土史あれこれ

高山彦九郎日記 (二)

孝婦千代・三河守の墓・御意の松城山など(津奈木太郎)下りて孝婦千代の墓あり。高さ六尺余り横も六尺ばかり、徳富多七(七)を建てたのは天明六年(一七八六)、彦九郎のおとすれたのは寛政四年(一七九二)で、六年前に建てられていた。松の木原もあり。野中村、これ孝婦千代の里なり。

わが青春の一ページ

第二回九州青年の船乗船記

津青事務局長 野崎憲章



九州は「九州」という立場にたつて、九州各県の青年を「青年の船」に乗せ、研修、および規律ある団体生活を通過して、心身を鍛錬し、寄港先における視察、および現地青年のおよび現地青年との交歓によつて、国際的視野を広め、ひるがえって、郷土の姿を正しく理解させ、もって次代をなす、たくましい九州青年の育成を、図る。

「九州は」といふ、出発。大きな、だが、スマートに真白くぬられた船が岸壁に横付けされている。そして、横に、九州青年の育成を、図る。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

主張 公害

漁協長 川崎一幸

公害が人間や自然をむしばむように、海の幸も文明開化の公害にむしばまれること例外ではない。水は万円の器に似、又、低きに流れる之は自然の法則である。陸のものには川に流れ、海に注ぐ。海は公害のたまり場である。水俣病は水銀汚染の因である。公害者は定説つけた。なるほどそうである。然し工場だけがその主犯ではない。私を私は主張したい。類のないものを私は主張したい。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。

仮称史談会 会員募集

高山彦九郎が津奈木に来た(約一八〇年前)までは、深木三河守のお墓の文字が読めた。現存は全部破れ、ほとんど見えない。こんなふうな年月がたてば、津奈木にあるであろう、貴重な歴史の資料が思いやられず、私一人の。

金言名言

名言は人生に対して不思議な力をもつ。ある時は人を教え導き、ある時は人を励まし慰める。

肥後狂句

苦しまされ思わん(つまできや言うた 共様きん) 苦しまされ思わん(つまできや言うた 共様きん)

双岳

苦しまされ思わん(つまできや言うた 共様きん) 苦しまされ思わん(つまできや言うた 共様きん)

49年度役員名一覽

- 津奈木校区婦人会 会長 山口孝子 副会長 川村節子 宮崎哲子 会計 齊藤アツ子 班長 委員 高見 磯見千枝子 柴竹鶴山 高見 磯見千枝子 浜崎 磯見千枝子 町中 千々岩頼子 松本チホ 新川 浜本ミツエ 芦浦サチ子 古川 竹本洋子 野島ケラ 大沼 柳道ツネオ 西 滋子 古中 久村君代 長原ミチ子 倉谷 岩本ヒロ子 沢井ミツエ 内野 坂本洋子 豊田サカエ 上下 竹田リヤ 竹田千重子 川内 西平エイ子 石本三子 赤崎校区婦人会 会長 尾花ミツ子 副会長 松田益枝津々木チエノ

お嬢さんの持つロソクが、明りの消された体育館に一つ灯り、それが各団体代表の持つロソクに移され、そして、キャンドルに灯され、そして、百八十三人の目が一斉に注がれて、何ともいえない感激の渦が起った。